

「聞く耳のないものと、とげのついた棒を蹴る人生」

使徒 23 : 12 ~ 26 : 32

最初にひとつの映像を観ていただきました。一人の女性が崖の上で永遠と編み物をしている映像です。彼女は自分が編んでいる編み物の重みで谷に落ちそうになりながらも、それを辞めることが出来ず、自分の髪の毛を使ってでもそれを続けました。最後は谷に落ちそうになりますが、髪の毛を切って助かります。彼女は辞めようと決断しようとしませんが、ハサミを見つけると、再びこれまでの習慣に従って歩もうとします。多くの人はこの女性のように無意味な目的のために生きています。だから自分の人生を振り返った時に「自分は何のために生き、存在しているのか？」と感ずるのです。そこで多くの人が選ぶ人生は、いかにしてそれを正当化しようか、という人生です。

■ 使徒 23 : 12 ~ 24 : 23

前回、使徒 23 章 11 節まで学びました。無実の罪で訴えられたパウロは、ユダヤ人の議会（サンヘドリン）で裁判を受けます。しかし、そこでパウロは復活に対して意見の異なるサドカイ人とパリサイ人の関係を利用して、衝突を起こさせ上手く切り抜けることに成功します。しかしその後、40人以上のユダヤ人たちが徒党を組み、パウロを暗殺しようとしています。自分が今までしてきたことを正当化するために、たとえ律法を犯してもそれをしようとする姿があらわれています。しかし、総督ペリクスのもとにパウロを送ります。そして、無事カイザリヤに着いたパウロは、ヘロデの官邸で守られることになります。その五日後、大祭司アナニヤと数人の長老がテルトロクという弁護士と一緒に、パウロを訴えにやってきました。すごい執念です。兵士たちに守られ、夜じゅう歩いてたどり着いたその道のりを、パウロ一人のためにやって来たのです。彼らも自分のしてきたことを正当化するために、大切にしていた律法を犯してまで、パウロを殺そうとしたのです。ペリクス総督もそんな生き方をしていました。彼の3番目の妻ドルシアは、王様であるヘロデ・アグリッパ2世の妹でした。元々、他の国の王様の妻として嫁いでいたドルシアを、ペリクスは奪って、自分の妻にしました。彼は結婚をも利用して総督という立場を得ようとしたのです。彼は元々、ローマ皇帝クラウデオの母の奴隷だった人物です。そしてクラウデオ帝の母の力によって彼は奴隷から解放され、その後昇進し、総督にまでほりつめた最初の人物でした。だから、なんとか奴隷から抜け出して、総督という立場を得ようとする執念が、彼を動かしていたのです。しかし2年後に彼は総督という立場を失ってしまいます。意地でも何かを得ようとするとき、私たちはそれを失ってしまうのです。パウロを訴えるために、弁護士まで連れてやって来たアナニヤたちですが、しかし元々パウロを訴えたのはアナニヤではありませんでした。彼らは裁判をする立場にいた人たちでした。ローマの法律では異議申し立てをしたものは、途中で告発を取り下げはならないという法律があります。しかし元々パウロを告発した人たちは来ないで、裁く側のアナニヤたちがパウロを訴えにやってきました。だからパウロは19節~21節で私が訴えられる理由はこのことはないかと答えたのです。そこで総督ペリクスは、パウロを訴えているものたちをよく知っている、千人隊長が来てから裁判を再開しようと言い、裁判は延期されました。

■ 聞く耳のないもの

その数日後、ペリクスと妻ドルシアがイエスを信じる信仰について話を聞きにやってきました。しかしパウロが正義と節制とやがて来る審判とを話したあと、ペリクスは恐れを感じ、「今は帰ってよい。おりを見て、また呼び出そう」と言いました。ここでパウロは何を語ったのでしょうか。それはこれまでペリクスが行ってきた、結婚までも利用して、自分の立場を守ろうとした、その行為でした。その時、ペリクスも自分のやってきたことを「まずい」と感じ恐れを抱きました。ここでペリクスは変わるチャンスがありました。しかし、彼は話を濁し、パウロを帰らせました。聞く耳をもてなかったのです。私たちは自らのしようとすることを何とか達成するために、いろいろな理屈をあたかも正義のようにくつつけて、それを続けてしまう愚かさがあります。神様は私たちが創造されたときの姿に戻そうとしています。しかし変わろうとするとき、私たちは変わらない自分の弱さを感じ、落ち込み、傷つけられ、変わらうとすることさえあきらめてしまうのです。しかし聖書は、変われないことの愚かさをあなたに伝えたいのではありません。神様は決してあなたを責めてはいけません。神様はあなたが「まずい」と感じた時に心を頑なにしていけないと語っているのです。

■ アグリッパの前でのパウロの弁明

裁判が延期されたパウロですが2年後に再びユダヤ人達から訴えられました。その頃ペリクスは解任され、新しくフェストという人物が総督に就任していました。彼はパウロに対して、ユダヤの法律で裁くことができず、無罪にするしかありませんでした。しかしそれはユダヤ人達から反発され、植民地であるカイザリヤを治めることができなくなるかもしれないという、難しい立場に立っていました。そんな時、ちょうどそこに、その地域の王であるアグリッパが訪問してきました。そこでフェストはアグリッパに助けを求めました。こうして、パウロはアグリッパの前で弁明する機会を与えられました。そしてパウロは神様によって造りかえられた証を語ります。するとフェストは、パウロに対して「気が狂っている」と言いました。そしてさらに大胆に語るパウロはアグリッパに「あなたは預言者を信じておられますか。もちろん信じておられると思います」と語りました。大祭司を任命していたアグリッパにとってこの質問はとても厳しいものでした。そしてアグリッパは「あなたは、わずかなことばで、私をキリスト者にしようとしている」と言ったのです。そして最後に彼らはその場を立ち去りました。

■ 聞きにくいことを聞く耳

今日の箇所には聞きにくいことを聞く耳がなかった人達が出てきます。総督だったフェストやペリクス。彼らは自分の立場を得るために、心を動かされそうになりながらもそれを拒否しました。パウロを訴えたユダヤ人達も、法律を破ってまで嘘の証言をして、パウロを殺そうとしました。そして今度は自分の立場を守ろうとした大祭司が、彼らに代わってパウロを訴えました。私たちは聞きにくいことから耳を背ける人生をやめなければなりません。神様は岩にも叫ばせて、私たちに伝えようとしています。だから私たちは人からかけられる言葉を受け止めていかなければなりません。人の言葉を自分の都合で用いてはいけません。ましてや自分の正しさを証明するために神をも用いてはいけません。もし私たちが正しければ、どんな欺きも、中傷も私たちに影響を与えることはありません。パウロはどんな異議申し立てを受けても影響を受けず、冷静に対応しました。しかし正しくなければ、感情的になり、もしくは感情を押し殺し、神様の言葉を受け入れようとしないのです。だからこそ私達は正しく決断して行動することが大切です。

■ 心のかたくななどの闘い

今日の箇所に出てきた人物の中に誰一人として心を素直にした人はいませんでした。みんな自分の立場や地位を守るために必死になって自分を守りました。しかし百人隊長や千人隊長は少し違いました。この後百人隊長に預けられたパウロはローマに向かいます。その旅路で百人隊長はパウロの言葉に段々と聞き従っていきます。そしてローマに向かう途中、嵐に遭い船が難破しますが、パウロの言葉によって助かります。しかし逆にヘロデ王の世代はここで終わります。そしてフェスト総督もこの場所から追われていきます。聖書はいつも「聞く耳のある者は聞きなさい。うなじをこわくしてはならない」と語っています。私たちは心を頑なにしていけないのです。

■ 神の計画からなる人生の決断！暗闇から光

神様は私たちに与えられた計画をどんな方法を用いても守られます。パウロは神の大きな摂理のなかで守られ、どんな妨害にあっても、この後ローマに向かいます。パウロの生き方は暗闇から光へと導かれる生き方でした。私たちの人生の暗闇が多ければ多いほど、神様はそれを光に変えてくださいます。当時のパウロはクリスチャンを迫害していました。彼は目を失い、見えなくなって暗闇の中にいたのです。しかしダマスコの途上で光に照らされ、彼は変えられました。失敗者だったパウロは、今日私たちのリーダーになりました。人を変えようとするのではなく、自らが光を選ぶとき、その人の過去の失敗は全て益となると聖書は約束しています。人生の決断とは、私たちが光を選ぶということです。私たちが何かを示されたとき、誰かによって何かを語られたとき、光の決断をしてください。もし私たちが闇の中で、光を選ぶ決断をするなら、私たちの人生は必ず光に変えられます。今日、心を頑なにせず神様の前に光を選ぶ決断をしていきましょう。

(要約者:永井匡史)

(2020年10月18日)